

活動報告書

報告者氏名:盛光秀之

所属:川崎市市立川中島小学校

記録日:2014年2月14日

【対象児の情報】

・学年

A児 6年 男

・障害と困難の内容

- 読みがたどたどしく逐次読みになってしまう。読み飛ばし、読み違いも多い。
- 漢字の読み書き定着は2年生程度。
- 画数の多い漢字は訓練すれば一時的に書けるようになるが、記憶を定着させることは難しい。
- 作文では、語彙が不十分で組み立ても悪く相手に伝わる文書を書くことが難しい。またこちらが質問したことに対しては、単語で言葉が返ってくる。例えば「昨日の授業どうだった?」「普通」など、「普通」という言葉をよく使う。
- 知覚統合力が低く、状況に応じた態度をとることができずに友達や担任を不快にさせることがある。
- 物を管理するのが苦手で、自分の持ち物がいつも周囲に落ちている。
- 予定を覚えておくことが苦手。
- 周囲の状況を読み取ることが苦手で、語彙数も多くないことから、場にそぐわない乱暴な発言をしたり、態度をとったりすることがある。

【活動目的】

・当初のねらい

- ① 耳から入る情報が記憶への定着へとつながる特性を生かして、Surface を利用して文書の読み上げ機能で聞くこと中心の学習スタイルを身につけること。DAISYの利用（知識量を増やす）
- ② 読めない漢字を Surface の文字認識機能を利用して、自分で調べることができるようになること。
- ③ 教科書をPDF化して、いつでも拡大することができるようにすることで読みの困難さの補助とすること。
- ④ できることが増えることで自己肯定感が増し、言動の調整がとれるようになること。

・実施期間

A児（2013年 6月～3月）

・実施者

氏名：盛光秀之 特別支援級担任

・実施者と対象児の関係

校内特別支援コーディネーターとして、週に一度取り出し学習または放課後の指導

【活動内容と対象児(群)の変化】

・対象児の事前の状況

学年が進むにつれて読む量や読めない漢字が増えたことにより、学習に対して無気力な状態になってきている。ただ、保護者は熱心で個別指導の塾に通わせたり、学校の教育相談を受けたりして児童の将来に対する不安を募らせている。

行動の調整や周囲の状況把握が苦手で、体育の時間など座る位置が明確でない場合などは集団から少し離れた位置にいたり、周囲を不愉快にさせる態度を指導されると「うぜー」「無理」など相手を挑発するような発言をしたりしてしまう。

・活動の具体的内容

① 教室での使用を促す取り組み

i. 使い方を学ぶ

① Surface の使い方指導②教科書のPDF、漢字のパワーポイント資料の紹介③DAISYの使い方指導④国語と社会のDAISY教科書を一緒に使う⑤そのほか、読み取り革命を使って教材をOCRして文字認識をすることによって和太鼓の読み上げ機能の紹介など、PCが学習の補助となり有効であることを伝える活動を中心にしてきた。

ii. 教室で使用できるように

前期はPCを使った学習に良さを感じたようで、家庭でもDAISYを使っている形跡が残っていた。その他にも操作に慣れるためにAlphabet catch というソフトを入れたが、それも家庭でやっている様子を保護者が確認している。また、前期はPCを教室に持ち込むことはしなかったが、国語の単元「やまなし」「イーハトーブの夢」では、本人が希望して教室内で使う姿が見られた。しかも自分でイヤホンを用意していたことから本人が教室で使おうと意図していたことが伺える。学級でPCを使うことについて、他の児童から担任へ質問が出たが、担任は「あったほうがわかりやすいなら使えばいいと思う」と答えると周囲の子どもたちはそれ以上深く聞かなかったということだった。本人はDAISYをととてもよい学習補助だと感じているようで、「これはいいね」と言っていた。

ただ、授業中に使いだすタイミングが分かりにくい様子だったので、担任からカードを提示してもらうようにした。(下写真)

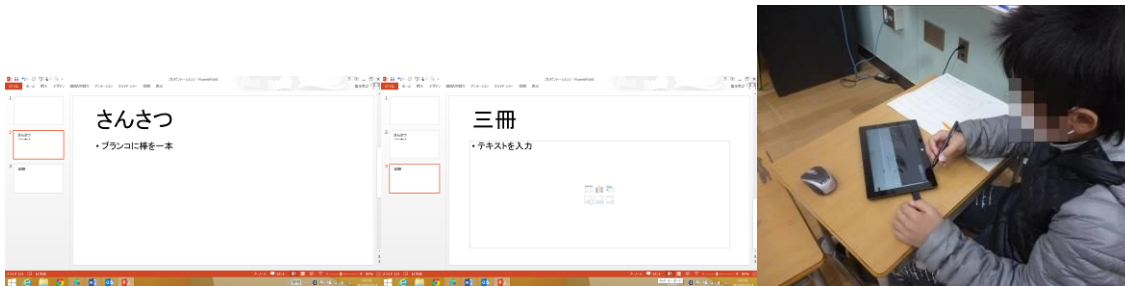


② 本児の困り感が強い、漢字の書き取り・読み練習

前期は週に一度の放課後指導を実施したが、本人が忘れることが多かったり、教室でトラブルを起こすことがあったりとなかなか回数を重ねられない状態だったが、後期になってから本人と保護者より教育課程内での取り出し学習希望があった。それでも6年生の行事と重なり、なかなか取り出し指導を積み重ねることは難しかった。また、給食準備中の指導を促したが、その時間は本人にとって友達と会話する大切な時間になってい

るようなので時々しか取り出し学習室に足を運ばなかった。

それでも、少しずつ会を重ねることで、補助記憶としてパワーポイントで漢字カード作りをはじめた。作り方は簡単でフリガナのページを作成して、その後答えを打ち込んだ。どうしても覚えられない漢字は自分や指導者と一緒に考えたヒントを中に表示した。以下は自分で作ったページで、冊という字を覚えることができなかったなので、パーツを分解して何に見えるかを考えさせたところ、「ブランコの中に棒がある」といったので以下のようなヒントを追加した。時々しか学習できない本児に対しては補助記憶媒体につながったことや、紙で作るカードは急いで書くと自分の字形が整わないこと、逆に丁寧に書こうとすると労力を使いすぎて疲れが出るため、きれいで素早く画面に映し出されるこの学習は意欲的で、熱心にすすめることができた。特にペン入力は雑に書いても認識してくれることが多いので、その点も本人は気に入っている様子だった。



・対象児の事後の変化

- ・耳から入る情報を認識することが有効なことを知って、教室の中で使おうとすることが増えていった。ただプリントの内容を読み取ったり、授業の話の流れについていったりすることは難しく、またカメラ機能を使ってノートテキングすることなどには使用しなかった。
- ・漢字学習に対しては、できることが喜びにつながったようで時間があると漢字を書いて練習するようになっていると担任から話を聞いた。また、漢字のパーツを少しずつ覚えたり、唱えて覚えたりすることもできるようになってきたので、漢字の種類や、部首に着目するようにもなっている。
- ・在籍するクラスでは、場を乱したりする発言は少なくなっている。また取り出し学習では、以前は「今日は何をするの？」と受け身の態度だったが、最近は自分から Surface を準備して授業を進めようとしていることから意欲が向上していることが伺える。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

私は校内の特別支援コーディネーターとして広く子どもたちと関わっているが、読み・書きの困難さを有する子どもたちの学年があがるほど学習意欲が減退する様子をよく目にする。特に国語と社会科は文字数が多い上、理解することも大切だが、まとめたり写したりする作業が多くあるために、読み書き困難児童は日を追うごとに学習から離れていってしまう。教室内でPCを使った支援ができればと考えていたが、怠けてなんかない2（品川裕香著）にあったように「みんなとちがったらたいへんだ」という子どもの思いもあるということ的前提として、支援が逆に作用することがないように学級担任と連携・相談しながら、慌ててPCの教室使用を進めてはこなかった。PCを使うことで他の児童が不平を言うような土壌は本校にはないと考えていたので、本人に使わせているうちに良さに気付けば使いたくなるのではないかと予想して、児童の反応をまっていた。10月に入り、児童の側に変化が出てきて、教室に持ち込み使いたいと担任に声をかけるようになっている。本人も今のまま学習していくには難しいことが理解できているようだ。その後も何度かタブレットを使って授業を受けている。使用頻度は決して高くないが、教室の中にタブレットを持ち込むことで学習の助けとなる可能性が十分にあると考えられる。

・エビデンス(具体的数値など)

教室でのタブレット利用の変化

月	10月	11月	12月	1月	2月
タブレット教室持ち込み回数	2回	2回	4回	0回	2回

タブレットは家に持ち帰ると忘れてしまうことがあるので、10月から学校の職員室においていた。11月の国語の単元がDAISY教材にない単元で使用ができなかったが12月は少し使うことがあり右の写真はその様子である。1月に入って使わなくなったので「使いにくい？」と聞いたところ、「毎回担任にとりに行っていいですかというのは面倒だ」と言っていたので、現在は教室のロッカーにおいてある。以前休み時間に友達とアルファベットキャッチなどゲーム性の高いものを使って、担任がいつも持たせたくはないと言っていたので、授業中だけ使ってもいいルールを守るように児童には話してある。そのような約束は簡単に破ってしまうことが以前は多かったが、今は守れるようになってきていることから、彼にとっては必要だと思える支援になっているようだ。



パワーポイントで作る自分漢字学習スライドを作った数

実施月 (時間数)	12月 (1時間)	1月 (2時間)	2月 (2時間)
作成スライド枚数	4枚	16枚	40枚

本校では前期と後期に一度ずつ漢字チャレンジ斉テストという学年に応じたテストを実施している。そのテストに関しては出題範囲が明確なため、努力がはっきりと表れるので本児は意欲が高い。2月になって操作に慣れたこともありスライド作成枚数も増え、2月後半に実施されるテストに向けて自分の力で準備している姿を見ると、彼にとってタブレットが学習の補助になっていることを実感した。

・その他エピソード(画像などを含めて)

卒業文集を作成中に対象児童ではない他の子どもBが文字の形をとることが苦手としているため原稿用紙を拡大してもらい書いていた。それを見た本児は「なんだよ、Bくん。そんなの使わずに自力でやろうよ」と言ったところ、Bは「これはAさんのタブレットと一緒にだよ」と言っていた。あまり詳しくは聞かないがクラスの友達Aが困難さをもっていることに気づき、あまり深く聞こうとしなかったことが伺える。本校では特別支援対象の児童に九九表を持たせたり、マス目のある解答用紙を使ったりしていることもあり、支援に対する抵抗が少ないことは今後も研究をつづけるうえでの土台となると考えている。